

本来の目的プラス、違うものを得ていけるような場所にしたい。

ぐるぐる海友舎プロジェクト
なんかわ
南川智子さん



GoON!



陶芸家
若狭祐介さん

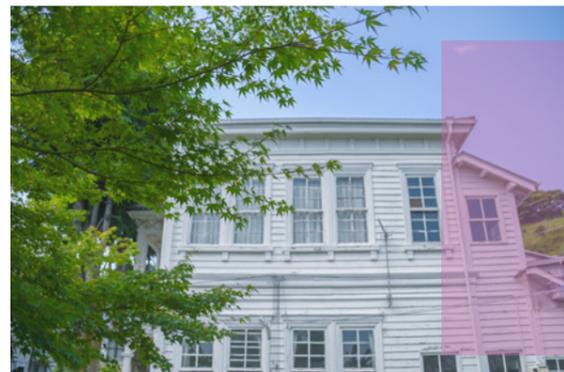
ETAJIMA GoON! Vol.5

Kaiyousya

足を運べば運ぶほど 新しい発見がある場所。

Vol.5
江田島町・中央

ぐるぐる海友舎
プロジェクト
なんかわ
南川智子



法人化され、来年には活動10年目を迎える。メンバーも設立当時の5人から増え、今では15人になった。「途中から参加しているメンバーもいるので、活動初期の事情などは知らない。だから、みんなで改めて活動を振り返ることで、これからの発展に繋がりたいなと思っています」

メンバーは職業も年齢層もバラバラ。市内外から個性豊かなメンバーが集い、思いを繋ぐ場を創り出している。「私が代表という立場でここまでやってきましたが、〇〇をするぞ！なんて意気込んだりはしません（笑）。「こんなことがしてみたい！」という意見が出れば、その都度みんなで話し合っ活動をしていきます」月に1回、第二日曜日を活動日として建物の掃除や手入れなどを行い、海友舎の管理に努めている。掃除は誰でも参加でき、その場で海友舎に訪れた様々な人と交流できるのも魅力のひとつだ。掃除が終わった後には必ずメンバーでのミーティングを実施。思いを口に出して、実現できるようにみんなで手伝いをしていくのがぐるぐる海友舎プロジェクトの面白いところでもあるのだ。

「毎年予期せぬ出会いがあつて面白いんです。訪れてくれた人たちとの出会いの中で、活動の幅が広がっていきることが魅力ですし、私自身とても楽しく感じています」訪れた人との対話を大切にし、「繋がる場所」を創り出す。プロジェクトに関わってくる多くの人の思いと共に、海友舎はコミュニティの場として再生し、新たな観光資源として、昔と変わらない場所から、今日も流れゆく江田島の時間を見守り続けている。

コロナ禍による活動自粛を経て 気づいた新たな魅力と可能性

地道な活動を続けて9年。市外から海友舎を訪れる人も増えた。しかし、江田島市内には「ぐるぐる海友舎プロジェクト」という団体も、海友舎という建物の名称すら知らない人も未だ多くいるとい

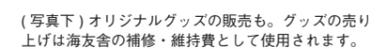
う。「この周辺に住んでいる方々の中にも、私たちのことを知らないという方もいらっしゃいます。だからこそ、地道に活動を続けるしかないんです」そんな中起きた、コロナウィルスの流行。やむを得ず、活動も一時中止となった。

一方で、このコロナ禍をきっかけに、新たな動きも起こった。「地域行事が全て自粛・中止となってしまい、少し時間に余裕ができた人が増えたのか、近所の方々が海友舎を覗きに来てくれるようになったんです。これまでは、ご近所さんに挨拶に行っても『手伝いたいけど、手伝う時間が無い』といった方が多かったんですが、時間ができたおかげで、お庭の手入れなどを手伝ってくる方が増えました。コロナ禍で、ぐるぐる海友舎プロジェクトとして大きな活動はできなかったけど、今までお会いできなかったご近所さん達と初めて繋がる事ができた。昨年は、改めて考えると、私にとっても、海友舎にとっても素敵な時間だったと思っています」

手伝ってくれる人が増えると、これまで手入れできていなかった花が綺麗に咲いた。自然と鳥が海友舎に訪れ、見たことの無い綺麗な蝶々も飛んできた。「今までは、建築や歴史好きな人が海友舎に来ることが多かったのですが、お花や草木が好きの方も来てくれるようになって、新しい広がり方が出来たんです！景観や自然が好きという人が、噂を聞いて海友舎に来てくれたことに感動しました。9年目にして初めて気づいた新たな海友舎の魅力ですね」



(写真上)アーカイブルームにはこれまでの活動を振り返ることができる数々の資料が。

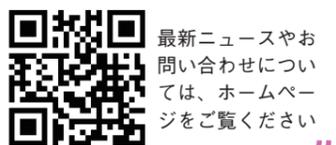


(写真下)オリジナルグッズの販売も。グッズの売り上げは海友舎の補修・維持費として使用されます。



みんなで手入れした茶敵なお庭。梅や紅葉など、四季折々の草花が楽しめます。

『ぐるぐる海友舎プロジェクト』



最新ニュースやお問い合わせについては、ホームページをご覧ください

江田島町中央。江田島町のシンボルともいえる第一術科学校から少し歩くと、江田島の歴史を見守り続ける「海友舎」がある。元々は旧海軍兵学校関係施設で、兵士たちの娯楽兼福祉施設だった海友舎。空襲さえも免れた歴史的建造物を、解体の危機から救い、地域のコミュニティの場として再生。「繋がる場所」を創り続けているのが「ぐるぐる海友舎プロジェクト」だ。

個性豊かなメンバー達と一緒に「繋がる場所」を創り出す

代表の南川さんは広島県に生まれ、大学進学で神戸へ。祖父母が江田島市に住んでいる関係で、子どもの頃は夏休みに遊びに来たり、ミカン狩りなどを楽しむ場所として、とても良い思い出のある場所が江田島だった。再び江田島に訪れるようになった2012年、海友舎に魅了された南川さんは「自分たちで手入れをしながら残していく」という方法で、海友舎を後世に残すため「ぐるぐる海友舎プロジェクト」という団体を、有志で立ち上げた。2020年2月にはNPO

もつとたくさんの方に海友舎のことを知ってもらいたいのはもちろん、足を運んでくれた人に、コロナ禍を経て得た新しい魅力も伝えていけたらと南川さんは意気込む。「これまでとは違う側面から新しいことを発見してもらえたら嬉しいんです。例えば、建築に興味を持って来た方が、江田島の歴史に触れたり、自然に興味を持ったり。江田島へ観光に来た方が、島の暮らしに興味を持ったり。本来の目的を果たすことはもちろん、プラスで違うものを得ていけるような場所にしていきたいと思っています」

足を運べば運ぶほど、新しい発見がある海友舎。「来る人が私とは違う面白い見方をしてくれて、新たな海友舎の魅力発見に繋がっている。明治時代に建てられてから、海軍の施設として使われて、戦後は普通の住居として、会社の事務所として使われて：色んな時間の積み重ねがあつて、今に至っている海友舎は、ある人からすれば「家」、ある人からすれば「職場」。見方を変えるだけで全然違った見え方になる不思議な建物ですよ」

南川さんの言うように、海友舎は単なる歴史的な建築ではない。たくさんの方の時間の積み重ねがあるからこそ、これまでを想像しながら、改めて海友舎を見てみるのも面白いのではないだろうか。

そして、海友舎に足を運んだ際には、建物を残すため、新たな出会いを繋ぐため活動を続ける「ぐるぐる海友舎プロジェクト」に関わる皆さんの思いに、少しでも触れてもらいたいと思う。